

実施報告書

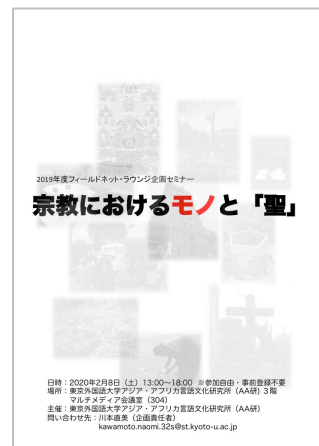
企画名：宗教におけるモノと「聖」

企画責任者：川本直美（京都大学大学院）

アドバイザー：田中雅一（国際ファッション専門職大学）

日時：2020年2月8日（土曜日）午後1時より午後6時

場所：AA 研マルチメディア会議室（304）



プログラム

13:00-13:05

開会の辞：吉田ゆか子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

13:05-13:15

趣旨説明：川本直美（京都大学大学院）

第I部 発表

13:15-13:50

発表① 飯塚真弓（早稲田大学）

「建築空間に宿す聖性と霊性—南インドのヒンドゥー教寺院司祭の住まいを事例に」
本発表では、南インドのヒンドゥー教寺院司祭の住まいを事例に、建築の物としての性質と住まいにおける人びとの日常／宗教実践の2点に着目し、建築空間に宿す聖性と霊性は、そこに住まう人びとが境界を作り、維持し、攪乱する実践と深く結びついていることを、サブスタンス概念を参照しつつ、明らかにした。

13:50-14:25

発表② 張詩雋（京都大学大学院）

「神仏を描く—チベット・タンカにおける写実的な表現」
本発表では、タンカ（チベット仏教・ボン教の神仏などを描いた宗教画や刺繍）の神聖性を、タンカ制作、とくにタンカ制作に用いる「写実的な表現」から考察した。タンカの制作過程におい

では、神聖性を確保するためにタンカから人間的な要素を排除し、非・人間化する一方で、人間をモデルに聖像を描く「写実的」なタンカや絵の具に制作者の唾液を混ぜるようなタンカを「人間化」する工程があり、タンカの神聖性にはこの相反するような二つの要素が含まれていることを指摘した。

14:25-15:00

発表③ ミア・ティッロネン（北海道大学大学院）

「モノとパフォーマンスの宗教観光—京都市・晴明神社の事例」

本発表では、神社にある御神木、御朱印、絵馬といったモノに着目し、神社がこういったモノを通してかれらの公式見解を提示する一方で、参拝者は自らのパフォーマンスによって新たな意味づけを行っている点を明らかにし、モノと実践によって宗教観光が形成されていると主張した。

15:00-15:10 休憩

15:10-15:45

発表④ 中村祐希（清泉女子大学大学院）

「記憶を伝えるキリスト教用品—長崎県島原市のプロテスタント教会の事例から」

本発表では、プロテスタントとカトリックにおけるモノを比較しつつ、島原の教会で聖餐容器として使われている有田焼のカップというモノが、本来であればごく普通のカップであったにもかかわらず、牧師の記憶と結びつくことで一種の「聖性」を帯びていく過程を明らかにした。

15:45-16:20

発表⑤ 川本直美

「我が家に『神』がやってくる—メキシコ西部村落における幼子イエス像をめぐる慣習」

本発表では、メキシコ村落で住民の手で管理されている幼子イエス像を対象に、聖像というモノが教会的世界（教会堂）と日常的世界（信徒の自宅）を頻繁に行き来することで、聖と俗の境界を攪乱しながら、それによって聖像が帯びる聖性が増していくことを明らかにした。

16:20-16:25 休憩

第 II 部 コメント、全体討論

16:25-17:10

コメント 吉田ゆか子、川田牧人(成城大学)、田中雅一(国際ファッション専門職大学)

17:10-17:55

全体討論

17:55-18:00

閉会の辞：川本直美

実施報告

2019 年度フィールドネットラウンジ企画の一環として、ワークショップ「宗教におけるモノと『聖』」が、2020 年 2 月 8 日の 13 時から、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) にて開催され、一般参加者も含めて 18 名が参加した。

本企画の狙いは、宗教におけるモノの存在に着目し、人間がいかにモノと関わっているのかを検討することによって、宗教的なモノの「聖性 (宗教性)」について再考することであった。

長い間、宗教に関する研究においては「信仰 (belief)」とは「象徴体系」であり、意味に関わるものと捉えられてきた。そこでは宗教的なモノも、単に聖なる存在あるいは霊的存在という意味を運ぶ器 (象徴) とされ、モノを人間によって解釈されるべき象徴として位置付ける傾向があった。しかし 1980 年代以降、物質文化研究を超えたモノ研究が盛んとなり、人間とモノの関係を解釈の主体/客体の図式から解放し、モノも世界において人間に働きかけるエイジェントであるとみなす関係論的な見方が生まれている。宗教学においても同様に、従来のテキスト研究への偏りに異議を唱え、2000 年代以降、宗教をマテリアルカルチャー研究のなかで捉えようという試みがなされている。しかし、こういった学問の潮流のなかで、特に人類学が提案する関係論の見方をした場合には、今度は宗教的なものが人々に喚起する聖性 (宗教性) が無視されて、日常の品々との相違が見えなくなるのではないだろうか。これが本企画の出発点であった。



当日の様子

そこで本企画では、人間と宗教的なモノの関わりについて、儀礼の場だけに限らず、日常的な空間（たとえば信者の自宅）のなかでも検討した。そして人間がモノとどのような関係を結んでいるのか、モノとともに何をしているのかといった視点から、日常的なモノと宗教的なモノを区別するであろう「聖性（宗教性）」について考えることを目的とした。この聖性については、これがどういったものなのかということをおおまかじめ設定するのではなく、人とモノの関わりをなかでどのように生成しているかという点にまずは着目し、各発表のなかで検討した。また、包括的な視点から検討するために、本企画では特定の地域や宗教にしぼらず、さまざまな宗教実践を対象に、人類学（飯塚発表、張発表、川本発表）と宗教学（ティッロネン発表、中村発表）のそれぞれの視点から人間とモノの関わりを検討し、理解を深めることを目指した。

当日は、5名の発表者に対して3名のコメンテーターからコメントがなされた。まず吉田ゆか子氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）からコメントがなされ、各発表は興味深いものの、全体として本企画の趣旨で述べた目標（宗教的なモノと日常の品々との区別）を達成するにはさらなる議論が必要である点が指摘された。その際には、神聖なモノと神聖でないモノを比較し、モノの聖性をグラデーションのなかで捉えて検討していくことが突破口となるのではないかという提案がなされた。

続いて、川田牧人氏（成城大学）からは、モノがもつ記憶と物語や身体性と人々の関係といった視点から、まずコメントがなされた。また、本企画においてはモノをとりまく経済的側面があまり取り上げられなかった点が指摘され、多面的にモノを見ていく必要性が述べられた。さらに、宗教とマテリアリティの研究に「イメージ」や「固定観念」も含めることができるようになるのではないかという点、つまり「イメージ」もまたマテリアリティとして捉えることの可能性も示唆された。

最後には、本企画のアドバイザー教員でもある田中雅一氏（国際ファッション専門職大学）から、モノの特性（耐久性・匿名性・均質性・共同性）やモノの聖化といった視点からコメントがなされた。また、各発表で重要であったものに、人々の実践によるモノの「個性化」があげられるが、それがすなわち「聖化」と言い切れるものではないのではないかという指摘がなされた。本企画の目的を達成するために、モノの聖化と神のような宗教的な存在の生成の関連を検討する方法も提案された。

今回のワークショップを通じて、多様な宗教、地域の事例からモノと聖性（宗教性）について検討することで、改めて宗教的なモノの聖性（宗教性）の動的な側面が明らかとなった。また人類学と宗教学の視点からそれぞれ発表したことで、制度・宗教的なモノ・人の絡み合った関係が多方向から検討されたと言える。これらを確認できたことは、本企画の大きな成果である。その一方でコメンテーターから指摘もあったように、

宗教的なモノと日常の品々との相違については十分に議論ができなかった。この点に関しては、今後の課題として検討していく。また聖なるモノの社会経済的側面やモノがもつイメージの物質性、モノの個性化と聖化といった、今回浮き彫りとなった共通のテーマにも着目していく必要があるだろう。

「宗教におけるモノと『聖』」というテーマは、本企画を第一歩として、今後もこの研究グループで定期的に研究会を行い、議論を深めていく予定である。そしてゆくゆくは学会の分科会として企画することや、論集の出版も視野に入れて活動を行ってきたい。

以上